

令和 6 年 5 月 14 日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00560

研究課題名（和文）文字生活史としての近世庶民の漢字意識－『小野篁歌字尽』周辺資料を中心として－

研究課題名（英文）"Ono no takamura Utajidukushi", for a material of character consciousness in Edo period

研究代表者

乾 善彦 (Inui, Yoshihiko)

関西大学・文学部・教授

研究者番号：30193569

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では「文字生活史」記述の一環として、『小野篁歌字尽』の総合的研究をおこなった。具体的には、『小野篁歌字尽』の資料性の整理と漢字分析（ ）、そしてその展開資料の整理（ ）をおこない、成果報告書『小野篁歌字尽とその展開』（2024.3、私家版）を刊行した。では、石川謙（1972）、山田忠雄（1969）の分類を基に、判型・項目の形式・項目数・頭書附録等によって、『小野篁歌字尽』諸本の整理分類をおこない、また、掲出字一覧と字体一覧を作成、掲出字の総体を提示した。では、展開資料を整理し、一覧を提示するとともに、代表的な資料として『小野篁＝[竹冠に愚]嘘字尽』の諸本と展開資料を整理した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究によって、現在時点での『小野篁歌字尽』の全体像を把握し提示できたことは、「文字生活史」記述のための1頁として貴重な資料として有効であるとともに、その書誌情報は、日本語研究のみならず、往来物研究、近世文学研究、近世出版研究においても貴重な基礎資料となるものである。成果報告書として刊行した『小野篁歌字尽とその展開』に資料として、収めた字体一覧、掲出字一覧、『うそ字拾遺』字体表は、『小野篁歌字尽』の漢字研究の基礎資料でもあり、「言語生活史」研究の記述方法の、ひとつのケーススタディーとして、一定の指針となるものと考えている。

研究成果の概要（英文）：In this study, we conducted a comprehensive study of "Ono no Takamura Utajidukushi" as part of the "History of Literary Life" project. Specifically, we organized the materiality of "Ono no Takamura utajidukushi" and analyzed its kanji characters (1), and then organized its development (2), and published a report on the results, "Ono no Takamura utajidukushi to sono Tenkai" (private edition). In section (1), based on the classification by Ishikawa Ken (1972) and Yamada Tadao (1969), we organized and classified the "Ono no Takamura Uta jidukushi" books according to size, item type, number of items, headnote appendix, etc. We also prepared a list of characters used in the poem and a list of character styles to present a general overview of characters used in the poem. In section (2), we have organized and presented a list of the development materials, and also organized the various books and development materials of "Ono ga Bakamura Usujidukushi" as representative materials.

研究分野：日本語史

キーワード：小野篁歌字尽 小野篁＝[竹冠に愚]嘘字尽 浮世絵と文字 文字生活史

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

『小野篁歌字尽』は、17～19世紀を通じてひろく流布した漢字を歌で覚えるように工夫された往来物のひとつである。石川謙『日本教科書大系』、山田忠雄『『小野篁歌字尽』書誌』、小泉吉永「往来物倶楽部」などによって、その版種は200を超えると思われる。それぞれの異版は、漢字の字体意識を考える上で興味深いものがある。たとえば、「杉」字は原形本では木篇に「久しきはすぎ」と、「木篇に久」の形であられるが、流布本の中には「彡はすぎ」と「杉」のかたちであられるものもある。また、「悪」は諸本「西に心」であられるが、いくつかの本の付録にある「歌字尽正誤」では、これを間違いと指摘する。このように、本書が字体意識を考える上で有効であることは、拙稿『『小野篁歌字尽』覚書(帝塚山学院大学研究論集26集、1991.12)』、佐藤栄作「草の字体へ」(論集 アクセント史研究会、2010.11)などの指摘するところである。ただし、石川、山田の研究以降、諸版の整理さえまだ十全には行われておらず、その全体像は把握しきれていないのが現状であった。

また、『小野篁歌字尽』とその影響下に成立した資料群は、文字資料を「文字生活史」としてとらえる上で、きわめて有効な資料群であるといえる。本書のパロディーである恋川春町『廓ニ[竹冠に愚]費字尽』、式亭三馬『小野ニ[竹冠に愚]謔字尽』は『小野篁歌字尽』の方法をふまえて新たな漢字を生成している。そこからは当時の人々の漢字の構造に対する意識がうかがわれる。曲亭馬琴『無筆節用似字尽』は漢字を絵に見立てたもので、当時の人々が思い描いた、漢字の形に対する絵との共通点がうかがわれ、それは葛飾北斎の絵手本である『己癡群夢多字画尽』に通じる。このように、これまで多くの資料が紹介されてきていたが、それを『小野篁歌字尽』の展開資料としてその全体像を把握することは行われてこなかった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、『小野篁歌字尽』とその展開資料の総合的研究をおこなうことである。おもに、三つの目標がある。一番目は、『小野篁歌字尽』自体の資料性の整理である。本書は17～19世紀を通じてひろく流布した漢字を歌で覚えるように工夫された往来物のひとつであるが、石川謙、山田忠雄、小泉吉永らの研究によって、その版種は200を超えると思われる。まず、それら諸本の整理を行う。申請者はすでに口頭発表「韓国中央図書館蔵『小野篁歌字尽』と慶長版『和玉篇』」(第115回国語彙史研究会、2017.4.22、同志社大学)の中で、大型本の諸本について、一面の行数、付録の有無、歌文の異同等による整理案を提示しているが、中型本、小型本、横本を含め全体の整理を行う。そして、漢字、訓の作成、字形一覧、本文異同一覧を示して、資料としての活用環境の整備をはかる。二番目は『小野篁歌字尽』の影響下になった資料群の総覧を提示し、主なものに対する資料としての活用環境を整える。具体的には、『廓ニ[竹冠に愚]費字尽』『小野ニ[竹冠に愚]謔字尽』『無筆節用似字尽』『己癡群夢多字画尽』を取り上げて、その注解をおこなう。三番目に、『小野篁歌字尽』の系譜を、歌で字を覚える方法の継承、新たな漢字を創出する方向への継承、文字を絵画化するパロディーの方法、『小野篁歌字尽』の項目を題材としてあらたな作品を創出する方法、の四つの流れの中において、それぞれの作品がどのような相関性をもつのかをさぐる。これらの総体を「総合的研究」として提示する。

3. 研究の方法

『小野篁歌字尽』自体の資料性の整理

まず、『小野篁歌字尽』の全体像を把握するために、石川謙『日本教科書大系』、山田忠雄『『小野篁歌字尽』書誌』、小泉吉永「往来物倶楽部」の研究を基にして『小野篁歌字尽』目録を作成する。さらに、字体資料として『小野篁歌字尽』を利用するために、『小野篁歌字尽』の掲出字一覧と字体一覧の資料を作成する。

『小野篁歌字尽』の展開資料

『小野篁歌字尽』の影響下になった資料群の総覧を作成して提示する。とくに、「歌字尽」の書名を手掛かりとして、さまざまな展開のあり方を資料の実態に即して記述する。

『小野篁歌字尽』の系譜

『小野篁歌字尽』の系譜を 歌で字を覚える方法の継承、新たな漢字を創出する方向への継承、文字を絵画化するパロディーの方法、『小野篁歌字尽』の項目を題材としてあらたな作品を創出する方法、の四つの流れの中において、それぞれの作品がどのような相関性をもつのかをさぐる。とくに、新たな漢字を創出する方向への継承において式亭三馬『小野■[竹冠に愚]謔字尽』は『小野篁歌字尽』の方法をふまえて新たな漢字を生成しており、これについては特に版種の問題があり、これを含めてひとまとまりの展開を遂げており、その全体像を明らかにする。

4. 研究成果

本研究の成果として、研究成果報告書『『小野篁歌字尽』とその展開』(総頁数 172 頁、2024 刊、私家版)を刊行したことである。報告書の構成は以下の通り。

はじめに

. 『小野篁歌字尽』

- 1. 『小野篁歌字尽』の諸本と分類
- 2. 字体資料としての『小野篁歌字尽』
- 3. 『小野篁歌字尽』の展開資料

II. 『小野■謔字尽』

- 1. 恋川春町『廓 費字尽 (さとのばかむらむだじづくし)』
- 2. 式亭三馬『小野■謔字尽』諸本
- 3. 『小野■謔字尽』からの展開

III. 艶本仕立ての『謔字尽』

参考文献

【資料1】『小野篁歌字尽』目録

【資料2】『小野篁歌字尽』字体一覧

【資料3】掲出字一覧

【資料4】『うそ字拾遺』字体表

特に資料編において、現在確認できている『小野篁歌字尽』の諸本一覧を提示し、字体一覧と掲出字一覧を提示し、『小野篁歌字尽』研究の基礎的な情報を共有できたことは、今後の『小野篁歌字尽』研究の進展をうながすものとなっている。

では『小野篁歌字尽』の基礎研究として、とくに諸本の分類法について論じ、石川謙『日本教科書大系』、山田忠雄『『小野篁歌字尽』書誌』、小泉吉永「往来物倶楽部」の成果の上に立って、判型・形式・項目数・頭書の有無と種類・異体注記の有無と種類によって整理し、石川分類、山田分類との対応を示した一覧を提示した。

では式亭三馬『小野■謔字尽』の諸本を整理し、その展開資料を整理して、『小野篁歌字尽』の展開の中で『小野■謔字尽』の流れが大きな位置を占めることを明らかにした。これによって、「嘘字」という方法が、近世の漢字意識を考えるうえで、極めて有効な資料であることを明らかにした。これは、本研究の大きなテーマである「文字生活史」を描くためには不可欠の資料群であることを意味する。その上に立って、展開資料における「嘘字」の方法の多様性を研究することで近世の漢字意識の理解がさらに深まることが期待される。

さらに において「艶本仕立ての『謔字尽』」の現在までの到達点を指摘した。これについては、まだまだ資料の発掘が課題であり、それが今後の大きな課題でもあるが、本論考において現在までに紹介されている資料に新収資料を加えて資料整理を行ったことで、この方面における研究基盤を作ったものと考えている。ただし、本稿ではその概要を提示したのみで詳細な研究については諸般の事情によって公表を差し控えたところがあるので、公表の準備は整っているものの今後の課題とせざるをえない。資料4に『うそ字拾遺』字体表を提示したので、今後の研究の足掛かりになるものと期待される。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 乾善彦	4. 巻 107
2. 論文標題 瘦々亭骨皮道人著述・校閲等関係書目一覧（稿）	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 国文学	6. 最初と最後の頁 220-234
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 乾善彦	4. 巻 -
2. 論文標題 漢文訓読と和歌散文連接形式の展開	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 奥村佳代子編著『周縁資料と言語接触研究』	6. 最初と最後の頁 59-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 乾善彦	4. 巻 41
2. 論文標題 かぐや姫はなぜ「読み書き」ができたのか 「手習」と和歌をかくこと	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『国語語彙史の研究』	6. 最初と最後の頁 77-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 乾善彦	4. 巻 4
2. 論文標題 契沖和歌資料拾遺（続）	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 なにわ大阪研究	6. 最初と最後の頁 73-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 乾善彦	4. 巻 16
2. 論文標題 文字と絵 「文字生活史」の観点から	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 ことばと文字	6. 最初と最後の頁 169-177
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 乾善彦	4. 巻 108
2. 論文標題 『小野篁[竹冠+愚]嘘字尽』の展開 『小野篁歌字尽』の展開記述のために	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 国文学	6. 最初と最後の頁 263-278
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 乾善彦
2. 発表標題 文字生活史資料としての浮世絵
3. 学会等名 第1回文献日本語研究会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 乾善彦	4. 発行年 2024年
2. 出版社 私家版	5. 総ページ数 172
3. 書名 『小野篁歌字尽』とその展開	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------